

日本ナレッジ・マネジメント学会

メルマガ エッセイ

森田松太郎・初代学会理事長との出会いと東海部会発足を振り返って

2022年1月

アタックグループ

代表パートナー 西浦 道明

名古屋大学の栗本英和教授からメルマガリレーのバトンを受けました。温故知新の観点から、日本ナレッジ・マネジメント学会（以下、学会）と東海部会の発足時について語っては、とのご示唆をいただき、私の覚束ない記憶をたどりつつ、20年ほど昔のお話をしたいと思います。

<森田先生との出会い>

私が学会とご縁ができたのは、故森田松太郎・初代学会理事長（以下、森田先生）との出会いがきっかけです。森田先生との出会いを創っていただいたのは、かんき出版の境健一郎前社長（以下、境社長）です。今も学会の監事をお引き受けてくださっているのではないのでしょうか。

いろいろなお縁から境社長と初めてお会いし、1998年の6月にビジネス本をかんき出版から上梓したのですが、これがご縁で境社長とは大変親しくお付き合いをさせていただくようになりました。

その翌年、1999年の6月、かんき出版さんのパーティに、夫婦同伴でお招きいただきました。そのパーティに、メインゲストとして招待されていたのが、森田先生ご夫妻でした。同じ公認会計士ということで話題が合うだろうということからでしょうか、境社長のお取り計らいで同じテーブルになったのです。

私は、森田先生ご夫妻と向かい合い、緊張した面持ちで話を始めました。驚きました。森田先生は、決して偉ぶらない、とてもおおらかな、何と表現すればいいのでしょうか、あの人懐っこい満面の笑顔で、私ども夫婦に接してくださいました。私はすっかり森田先生のお人柄に引き込まれ、大いに打ち解けてしまいました。パーティの後半には、長年お付き合いしてきた先輩と後輩の間のような雰囲気が出来上がっていました。

<東海部会の立ち上げ>

そのパーティの後半で、森田先生から、突然、「君、名古屋で学会の東海部会（以下、部

会)を立ち上げてくれないか?」と持ちかけられたのです。「どのようにすればいいのですか?」という返答から部会設立についての話が始まりました。

「部会を地方で立ち上げるには、シンクタンクと大学教授に加わってもらわなければならない。」「名古屋のシンクタンクと言えば東海総合研究所(旧東海銀行系のシンクタンク、現・三菱UFJリサーチ&コンサルティング、以下、東海総研)ということになるだろう。」「大学教授ならナレッジ・マネジメント(以下、KM)に興味を持っている経営学者がいい。」「まずは、KM普及のために東京から講師を送り込むので、そのセミナーに、中部産業界の人々をできるだけ多く集めてほしい。」ということでした。

お酒が入っていた勢いもあって、パーティの終盤には、「分かりました。頑張ってみます!」と、私は答えていたのです。

KMに関しては、野中郁次郎・竹内弘高共著の「知識創造企業」を読んでいたもので、私も大いに興味がありました。東海総研なら当時の社長と知己を得ていましたし、さらに、大学教授と言えば、名城大学の西大教授とは、大学の同窓で親しくしていました。「何とかなる」との直感が、私を後押ししたのです。

そんなことから、2000年、KM普及のため「KM研究会」を立ち上げ、野中郁次郎先生をはじめとする、学会にまつわる著名な講師をお招きし、計5回のセミナーを開催しました。名古屋では初めてのことでした。現在、学会長と理事長とを務められている一條和生先生にも、2000年12月に私どもアタックスの名古屋事務所でご講演をいただいた次第です。そして、2001年には、「学会第6研究部会」として、正式に、部会が立ち上がったのです。また、2007年から2021年までは、本学会の理事を拝命いたしました。

<森田先生の思い出>

森田先生は、私より20歳、先輩です。しかも、公認会計士業界の成長発展時代に、世界のビッグ8(今は合従連衡し、ビッグ4に)と、日本を代表して渡り合い、大きな貢献を果たされました。

森田先生は、公認会計士でしたが、接した誰もが感じたことは、視野が広く、人物が大きく、発想が柔軟であり、あらゆる意味で、公認会計士という世間的イメージを遥かに超えた方でした。企業経営全般に対する、深く、幅広い見識をお持ちでした。したがって、企業経営には、財務分析にとどまらず、ナレッジ創造という非財務面が重要であることを強く認識しておられました。

森田先生が、「『KM』というものを発展させ深化させ、日本企業の経営力を高め、日本経済を発展させていくには、大学関係者、産業界の人々、そしてシンクタンクの3者が力を合わせなくちゃいけないんだよ」と仰っておられたことが、今も、鮮明に記憶に残っています。森田先生は、かのドラッカーとも知己を得ておられたようです。森田先生が米国にドラッカーを訪ねた際、「高齢のドラッカーが私たちを車に乗せてくれ、運転するんだよ。危ないからやめてくれとも言えなくてね。」と、冗談めかしく仰っておられました。

また、ドラッカーは、「自分は経営学者ではなくてコンサルタントだ」という矜持を持ち、経営学が、純粋学問的なアプローチのみでいいのかと、フィールドの研究が大切だと考えておられたようです。森田先生は、ドラッカーに共感共鳴しておられたからこそ、この学会を設立され、KM という新しい発想で、且つ、大学・産業界・シンクタンクという 3 者のバランスを大切にすることで、企業経営の諸問題の解決に立ち向かわれたに違いないと思います。

さて、20 年ほど前にタイムスリップしましたが、昔話はこのくらいにして、次の方へ、メルマガリレーのバトンをお渡ししなければなりません。

私が今の学会に知己が少ないことから、栗本理事より、「次は、学会の新理事である、N E C 日本電気の八田光啓氏へバトンを渡していただくと良いでしょう」とご推挙をいただいております。八田さま、どうぞ宜しくお願い申し上げます。